

# 逃げずに救助「誇り」

## 悲しみを抑え長男捜す

石川祐一さん(49)、貴美子さん(49)

宮城・大衡



3・11大震災

壁は破られ、柱はむき出し。北上川の河口、石巻市北上町の市北上総合支所は破壊されていた。「おっかなかったな。やんだくなる波の高さだ。悔しいな」

職場から連絡を受け、夫婦は13日から連日、北上町地区に入っている。大衡村から約60分、軽トラで2時間の道。がれきの山を歩き、現地の病院と遺体安置所を回る日々だ。ガソリンは親族から分けてもらう。

2人が聞いた「その日」の拓真さんは、大津波警報発令後も支所に残ったという。支所職員らと協力し、近隣住民ら70人余りを2階に避難させた。歩けない高齢者をおぶ

り、車いすを抱えて、警備に携わる者の使命感か。「的確な判断だ。ただ、津波があまりに大きかった」。居合わせた支所職員牧野輝義さん(49)が証言する。

同僚男性も不明のまま、牧野さんは漂う角材につかまって生きた。「支所でも偶然一緒だったが、心強かった」。被災者支援に追われる牧野さんの目に、ヘルメットと防弾チョッキ姿の拓真さんが焼き付いているという。

逃げるに人命救助を優先した拓真さん。「当然の行い。おっとりした子だと思っていたのに。私



の誇りだ」。石川さんは自づに言い聞かせる。17日が27回目の誕生日だった。妹2人が、家にある粉ミルクやホットケーキの粉でケーキを作った。「Happy Birthday たくま」と家族4人で祝った。

「誕生日までに見つけなかった。もっと山の方へ逃げてほしかった」。貴美子さんも、母として無念の思いを隠せない。

石川さん夫婦は毎朝、軽トラックにおにぎりや野菜、下着類などを積んで、牧野さんら支所職員が詰める対策本部に届けている。北上町地区は津波で多くの家屋や田畑が流された。「苦しんでいるのは私たちだけじゃない。助け合わなくては」

友人らも現地の窮状を聞いて、炊き出し隊を準備中だ。他人のために身を投げ出した拓真さんの思いを受け継ぐこと。

「家に連れて帰って、添い寝してやりてえ」。石川さんは24日、捜索の現場に重機を入れた。自ら操作する。支所から約1キロ離れた現金輸送車にあった、息子の運転免許証入りの財布を胸に。



津波で行方不明になった長男の拓真さんを探し続ける石川さん夫婦＝23日、石巻市北上町



現場近くの車中にあった拓真さんの財布と社員証

現場近くの現金輸送車にあった、息子の運転免許証入りの財布を胸に。

(片桐大介)